

# Newsletter of Japanese Coral Reef Society

## contents

page

NL50号記念企画 歴代広報委員長とNLを振り返る	2-3
沖縄生物学会・日本動物分類学会合同大会公開シンポジウム参加報告	3
連載1:若手会員の眼 -39-	4
NOP/NGO紹介 -18- [コーラル・ネットワーク]	4
連載2:しらほサンゴ村だより -7-	5
連載3:サンゴ礁関連施設探訪 -24- [パラオ国際サンゴ礁センター]	5
日本サンゴ礁学会 第14大会のご案内	6
It's Time to Fly! -5-	7
日本サンゴ礁学会 2009-2011年度 2011-2013年度 合同評議員会議事録ダイジェスト	7
日本サンゴ礁学会 会長・評議員選書結果報告	7

Newsletter of JCRS

50号  
記念

おかげさまで創刊50号!



サンゴ礁学の  
新たな展開  
さらなる成果に  
期待!

2009

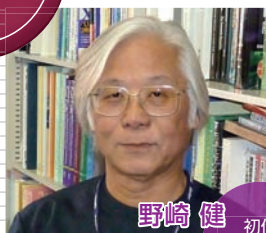
2010

2011

今後とも  
どうぞよろしく  
お願いいたします

NL50号  
記念企画

# 歴代広報委員長とNLを振り返る



野崎 健

初代  
広報委員長



山野 博哉

第2代  
広報委員長



日比野 浩平

第3代  
広報委員長



藤村 弘行

第4代  
(現)広報委員長

**中村:** みなさまこんにちは、本日の座談会の司会を担当させていただきます、広報委員の中村崇です。今回、記念すべきニュースレター（以下NL）50号の発行に際して、歴代広報委員長にお集まり頂きました。この機会に、これまでの委員会運営やNL編集上の苦労話、やりがい、将来展望まで、ざくばらんに幅広く語っていきたくと思います。よろしくお願いたします。

**中村:** まずは、初代広報委員長として、1997年の委員会立ち上げ時からNLを軌道に乗せるまでご尽力されました野崎さんにお伺いいたします。発足当時の状況、力を入れた点、苦労された点などお聞かせください。

**野崎:** 日本サンゴ礁学会設立当初、広報委員会の主な作業は日本サンゴ礁学会設立総会（1997年11月）を特集したニュースレターの創刊でした（1998年1月）。まず、NLの体裁をどうするかが重要で、頁数（枚数）をA4版8頁（A3版カラー両面印刷2枚）として印刷費用を節約しました。NLの表紙等のデザインとレイアウトは茅根先生のご紹介で、つくば在住のデザイナーの原部さんをお願いしました。いわゆる学会NLとしてはカラフルで、コミックス・アニメ世代の若手会員には違和感はないと思いましたが、年配の大先生方がどう思われるか少々不安でした。しかし、最近のNL（電子版）では、当初のトーン（光り輝くサンゴ礁のイメージ）が発展して引き継がれているのを見ると、これでよかったのだとバカボンおやじは思っています（笑）。

**中村:** なるほど、毎号楽しみな表紙の原点がそこにあったわけですね。歴代表紙イラスト集については、記念企画としていますので、あわせてご覧ください。NLの内容については、連載記事はどのように企画されていたのでしょうか。また、当時の広報の仕事として、NL以外に広告取りなども始まったと伺っています。その辺についてのいきさつなどお聞かせください。

**野崎:** 創刊号の掲載記事は、山里会長（当時）の「日本サンゴ礁学会NL発行にあたって」に始まって、総会と講演会の様子の写真、設立総会議事録、第一回評議員会議事録、各委員会委員長の所感・抱負、などでしたが、

新連載1「若手会員の眼：梅澤さん」、新連載2「阿嘉島臨海研究所」の連載も始まりました。それから、重要記事に巻末の広告がありました。広告の勧誘は、はじめは簡単なのですが、次第に広告主を探すのが大変になったと記憶しております。

創刊号に引き続き、第2号（1998年7月1日）では、近森、小西、両先生の連載「サンゴ礁に暮らす人々」と「サンゴしょう夜話」が始まりました。両先生の連載、「若手会員の目」、「サンゴ礁関連施設紹介」などの連載が現在まで続いているのは、大きな喜びです。また、新規記事としてフォーラム欄（中野義勝：「海は負けない」）とReef Site欄を設けましたが、残念ながらその後企画されませんでした。

第3号（1998年9月12日）では、連載物に加えて日本サンゴ礁学会第1回大会プログラムと緊急特集「サンゴ白化問題」を取り上げました。私としてはこの第3号でNLの基本構成が完成したように思います。さらに、編集委員会ではありませんが、日本サンゴ礁学会第1回大会（1998年11月1日～2日）の講演要旨集の編集を担当しました。要旨集の各頁の右肩に「日本サンゴ礁学会」と書き込んだのは私のアイデアで、その後、JCRSのロゴが決定したのに伴い、第3回大会要旨集からは各頁の右肩にロゴが付くようになりました。

**中村:** 現在、私が編集を担当している連載が実は創刊当時から続いていたというのほづくりしました。それに、広告取りの苦労もさることながら、新企画を次々に軌道に乗せていかなければならない時期で大変だったのです。余談ですが、大会要旨集デザインがこのころに決まったというのも面白い裏話ですね。

**中村:** 続けて山野さんにお伺いいたします。山野さんは2代目委員長を野崎さんから引き継がれ、広報委員会のメンバー拡充など、さまざまな発展を進めてこられました。当初、どのようなところに力を入れて取り組まれましたか？また、運営していく上での苦労などもありましたらコメントをお願いいたします。

**山野:** 記録をたどってみると、私が野崎さんからNLを引き継いだのは2001年のことでした。例えば、野崎さんが立ち上げられたりすらすら突進して道を作られたのを、私

がその後で整地したということになるのではないかと思います。NL発行を引き継ぐと同じくらいの時期に広報委員長にもなりました。NL編集を担当制にしたのもこの頃です。幸い、周囲の方々に恵まれて、定期的に刊行することができました。その頃のコアメンバー、波利井さん、中井さんにはとても感謝しています。NL発行だけでなく、ウェブページの本格立ち上げもやりました。とにかく、いろいろ形を整えていくことに力を注いだのを覚えています。そうこうしているうちに広報委員のメンバーもだんだん増えてきて、時々やる飲み会がとても楽しかったのを覚えています。私は2007年から広報委員を退いて学会誌編集委員長をやっていますが、その時の経験が生きているような気がしますね。学会誌も定期発行したり国際化したり、やることだらけでなかなか大変です。波利井さんには編集担当委員に入っていたいただき、またもお世話になっています。あと、学会誌編集委員会が発行予算を使わずで、広報委員会のNL発行を圧迫してしまったのは申し訳なくとも複雑な気分です。学会誌は一部電子化しますので、予算の使い道はあるのではないかと考えています。うまく調整して、NLをもっと活発化するのに貢献したいなと思っています。

当時は何も考えていなかったのですが、サンゴ礁学会の良いところは、こうした若手（当時）にも表立って活躍の場があることかな、と今になっては思います。広報委員長という立場を与えてくれたおかげで、私の思い通りに、すいぶん自由に動くことができたと思います。まだまだ学会はやることありますので、若手の方々に委員長になってどんどん動かして欲しいなあと思います。応援しますよ。

**中村:** 学会の看板でもあるHPの立ち上げから運用なども考えると、苦労が絶えなかったことと思います。当時のコアメンバーの方々に感謝です。山野さんに続いて、3代目委員長を日比野さんが引き継がれました。委員長に就任された当初、広報委員会やNLの雰囲気はどんな感じだったでしょうか？

**日比野:** 私が山野さんから委員長を引き継いだ時は、すでにNLもWEBも基本形が出来ていましたので、それを絶やさず継続することが最大の課題でした。当時は年4号

のペースで紙媒体を発行し、ほぼ毎号で広告を掲載しておりましたので、そのノルマ(?)を維持するだけで大変だったと記憶しています。幸か不幸か広報委員は意識の高い人達が多かったので、メールは1年中（正月なども含め）絶え間なく飛び交い、メーリングリストのカウントは1年半足らずで2000件近くに達していました。さらに個別にも様々な連絡調整が必要でしたので、平均で1日4～5通やりとりをしていたこととなります。広報のメーリングリストは広報マターに留まらず、学会の運営などの話題についても（恐らく評議員会MLより）活発に意見交換が展開されていたので、引切り無しに舞い込んで来るそのようなメールを「やっつける」のが日課でした。委員長をやっていて一番印象に残っているのが、その異様なテンションの委員らとのメールのやり取りでした。

**中村:** 私自身は、途中からの広報委員加入だったため、当初オプザーバーとしてメールのやり取りを見ている側でした。当然ながら、日比野さんのご指摘通り、朝一番でメールソフトを起動してみると、信じられない時間帯にメールでの議論が進んでいたりして、広報の人はいつ寝ているのだろうと驚いたことがあります。とにかく凄かったですね。とはいえ、大量のメールにも免疫ができたのではと思います。

**日比野:** とはいえ、さすがに仕事への支障も出てきておりましたし、広告の獲得では、事務局でもなんでもない若手の委員が個人的な伝手に頼り込んで掲載してもらおうというきわどいことをやっておりましたので、当然トラブルも多々ありました（結局、広告獲得はそれ以上広報が単独で続けることは問題があると判断し、評議員会に返上することになりました）。

**中村:** 確かに、広告掲載にかかる道筋、維持していくための労力については、ボランティアの範疇を超えそうだったのでしょね。

**日比野:** 年4号を3号に減らすとか、WEB化（電子化）の是非などについて議論していたのもこの頃だったと思います。100%ボランティアの委員会でごくまで活発なもの珍しいと思いますが、個々人の熟意と労力に頼るうて支えられてなんとか維持していたところがありますので、学会の広報の継続

歴代広報委員長とNLを振り返る

性という観点からは、よりスペックを落としたり組織的に継続できるシステムを作って行かなくてはならないと思います。個人的には、広報委員長をやっているといふ勉強になりましたが、至らないところも多々あったと思いますので、この場を借りて御礼とお詫びを申し上げます。

**中村:** いろいろとご苦労をされていたと思います。その後、4代目委員長として藤村さんをご活躍されています。そこで、まずは、これまでを振り返りつつ、現状と今後の展望をお聞かせください。

**藤村:** サンゴ礁学会は単に学術目的に特化した学者同士の集まりではなく、広くサンゴ礁に関心のある人々の共通のプラットフォームとして設立されています。そのようなことから、サンゴ礁の非常に多岐に渡る問題を取り扱っており、通常の学術集団よりも社会的責任の重い組織となっています。学会運営は完全にボランティアでありながら責任と負担が大きく、各委員会の活動は相当にきつい状況であると感じます。それでもこれまで若い人材が積極的に参加してくれていたおかげで広報は活発な委員会の一つであると自負していました。むしろ委員長の私が一番不活発でいつも反省しています。そんな中、赤字学会の経費削減のためとはいえ、広報のNLの印刷発送費が真っ先に事業仕分けの対象となったのは多くの広報委員の納得のいかないところでした。これまで活発に広報を支えてくれたメンバーの離反が相次ぎ、もちろんお辞めになった方々は、そのようなことを理由にはしていませんでしたが、少なくとも無理をしても学会のためにかんばろうとする意志を削いだことは間違いなかったと思います。現在は学会のwebページを今年の9月ごろをめどに刷新すべく、

作業を進めています。

**中村:** 確かに、広報委員会メンバーの士気低下があったと思います。Web媒体のみという変化は現代に合っているとも言えますが、やはりアクティブに発行して送ってくると読もうという気になりますし。「ウェブにアップしたので見てください」というのでは、必要な時しか見ないのではという危惧があります。せつかくの記事内容でも読む人が少なくなっているのではもったいないですし、いかにしてその辺の問題を解決するかが今後の課題になるでしょうか。

**野崎:** NLの電子化については、当然(いよいよorやっと)という感じですね。しかし、関連して気になることがあります。それは著作権の問題です。NLの関連記事には、当然、著作権があるのですが、現在、著者と日本サンゴ礁学会の間で著作権の取り決めがありません。特に、近森先生の連載はちょっと手直しすれば単行本になる内容ですので、注意が必要です。逆に日本サンゴ礁学会が中心になってNLの連載記事を出版する企画も考えられます。

**中村:** 連載記事の多くは、十分読み応えのある資料としての価値も高いものだと思います。今後、出版も視野に入れていくことで、記事を執筆してくださる方だけでなく、NL編集に携わる広報の士気向上?につながるのではと思います。著作権の問題については、これから確認していかなければなりません。

**野崎:** 日本サンゴ礁学会が順調に発展していることは喜ばしいことです。各種の企画も進められ、内容のある出版物もいくつか発行されています。たとえば、環境省・日

本サンゴ礁学会(編)の「日本のサンゴ礁」も労作の一つですが、環境省が発行者になっており、著作権は環境省にあることになりま。予算のスポンサーが環境省だから仕方がありませんが、注意しなくてはならないことです。学会も相当大きくなったのですから、広報だけではなく、著作権の問題をそろそろ整理しておく必要があると思います。

**藤村:** 紙媒体の印刷が大幅に減り、正規会員としての特典が皆無となった今、学会員であることの優越感というか、会員だからこそ得られるサンゴ礁情報をどのように集め、どのようにすれば電子媒体NLと新webで感じていただけるのか悩んでいます。会員の脳内に直接内容が届く攻撃機動隊のような伝達方式はないものでしょうか(笑)。紙や電子などもはやどうでもいんです。とにかく会員特典として感じていただけるサンゴ礁の情報をしっかりと皆様へ伝えるようにしてなければいけません。

**中村:** そうですね。おっしゃる通りだと思います。無理なく地道に続けていける体制で、効果的なPRが出来る方策が必要です。この座談会記事を読んでくださっている会員の方からも良い(コストがかからないけれど効果の高い)ご意見がありましたら、ぜひJCRS 広報委員会(jcrs-pub@mlc.nifty.com)へのご連絡をお願いいたします。

それでは最後に、日本サンゴ礁学会の今後の社会的な活動の広がりについてはどのようにお考えでしょうか。特に学会の特徴として、社会的責任の部分が大きいと感じていますが、どなたかご意見をお聞かせください。

**野崎:** 日本サンゴ礁学会には会友会員という制度があります。この制度は、学生や研究者などのサンゴ礁の専門家に対して、ダ

イバーなどのサンゴ礁に関心のある一般の人たちに対するサービスを念頭において設立されたものです。このため、NLも、最初、一般受けしやすいと思われるデザインにしました。ところが、最近のweb siteをみると、学術的内容あるいは研究者間の連絡に終始して、一般の人たちに対するアピールが少ないような気がします。会友会員の減少もこれに関連しているのではないのでしょうか? 東日本大震災におけるNGO、NPO、ボランティアの働きを見ますと、一般の人たちの貢献は馬鹿にならないような気がします。日本サンゴ礁学会もより広い人々の力を取り込めるような工夫が必要なのではないでしょうか? ただし、異常に熱心なサンゴ保護やサンゴ移植の活動家を見てみると、学問的に問題がある部分が少なくないのも事実ですが、社会に開かれた学会活動を期待したいですね。

**中村:** 今回ついにNL50号の発行となったわけですが、参加いただいた歴代広報委員長の皆様、これまで広報に関わってこられてきた委員各位、記事執筆をいただいた皆様にこの場をお借りして深く感謝したいと思います。これからの広報委員会活動も少しずつ変わっていくとは思いますが、NLの編集と発行は、広報活動の屋台骨的な位置づけがなされていると思っています。今後、新しく参加される若手の委員のみならずも新連載企画や、単発企画、面白いアイデアが挙がってくることを期待しています。また、読者会員の皆様からの引き続きの叱咤激励をお願い申し上げつつ、今回の座談会を締めさせていただきます。

7月吉日

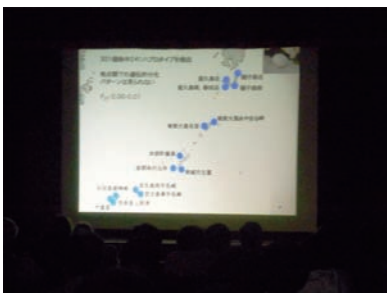
報告

●●● 沖縄生物学会・日本動物分類学会合同大会公開シンポジウム参加報告

琉球大学熱帯生物圏研究センター・日本学術振興会特別研究員  
井口 亮 iguchi.a0218@gmail.com



筆者近影



シンポジウム会場の様子

2011年、6月4日に開催されました。沖縄生物学会・日本動物分類学会合同大会公開シンポジウム(琉球大学理学部海洋自然科学科生物系と

の共催、琉球大学・大学会館3階ホールにて開催)、「琉球の生物地理--今後の展開に向けて--」に参加しました。今回のシンポジウムは、これまで集団

の分化に関心が集まりがちでありました琉球列島における生物地理学的研究を、分散などの別の側面からも議論するという趣旨で開催されました。オーガナイザーの一人であり、琉球大学熱帯生物圏研究センターの戸田守先生から、シンポジウムの趣旨説明があり、引き続き、国立科学博物館の國府方吾郎先生から、陸生植物を対象とした研究、井口からは海洋ベントスを対象とした研究、鳥取大学の鶴崎展巨先生からはザトウムシ類を対象とした研究が発表されました。どの生物群も、分断だけでは説明で

きない地理的分布パターンが見られるなど、興味深い成果が報告されました。最後の発表として、戸田守先生から両生爬虫類を対象とした、個々の種の分布パターンに基づく分散の推定に関する試みについて報告がありました。総合討論では、オーガナイザーの一人であり琉球大学教育学部の富永篤先生より、今後の研究の展望と、他の分類群への関心について、講演者への質問があり、それぞれの研究を踏まえた意見が述べられ、会場の聴衆を交えた議論もあり、盛況に終わりました。

連載 1

若手会員の



A young member's eye

高知大学大学院総合人間自然科学研究科  
黒潮圏総合科学専攻  
中村 洋平  
ynakamura @ kochi-u.ac.jp



みなさん、こんにちは。高知大学の中村洋平です。私の専門は魚類の生態学で、学生の頃からサンゴ礁-海草藻場-マングローブ域の魚類分布機構に関する研究を行ってきました。現在では、これらの生息場所の劣化がサンゴ礁魚類に及ぼす影響や魚類資源保全に有効な海洋保護区のデザインにテ-

マを發展させて、沖縄やフィリピンで調査を行っています。これらの研究内容についてはいずれ別の機会でごさまにご紹介したいと思います。本稿では高知県で行っている研究について少しお話をさせていただきます。

高知大学の物部キャンパスから車で1時間ほど離れたところに「横浪林海実験所」という研究施設があります。この施設は、高知県水産試験場と高知大学と京都大学によって共同運営され、海と森を対象にした野外教育施設として、学生実習や研究などに幅広く利用されています。実験所の前には湾口約500mの半円状の湾が広がり、その海の中をのぞくとイシサンゴ類が海底全面を覆うほど発達しています。イシサンゴ類の種数は約50種とみられていますが、その中でもクシハダミドリイシ、エンタクミドリイシ、スギノキミドリイシが被度で優占しています。また、毎年7月頃になると、南方から黒潮によって運ばれてきたと考えられる熱帯性魚類が数多く出現し、12月頃までさながら沖縄のような海を見ることが出来ます。これまでの調査で約170種の魚類が確認され、その8割がベラ類、チョウチョウウオ類、スズメダイ類を中心とした熱帯性魚類であることがわかってきました。

横浪林海実験所前のイシサンゴ類の被度は1980年代後半から急激に増大してきたそうです。高知県沿岸は黒潮の影響を強く受ける温暖な海域ですので、イシサンゴ類が群生していることは昔からよく知られていますが、それでも近年、多くの岩

場でサンゴ群落広がってきています。岩場からサンゴ群落に沿岸環境が変化することで、沿岸魚類相にどのような影響が出てくるのでしょうか。例えば、熱帯性魚類が増加し、温帯性魚類は減少するかもしれません。また、これらの熱帯性魚類の供給源はどこにあるのでしょうか。沖縄かもしれませんし、奄美大島かもしれません。近年では冬季海水温の上昇に伴い高知沿岸で越冬している熱帯性魚類もいます。したがって、温帯沿岸で繁殖している熱帯性魚類もいるかもしれません。これらの研究は、卒論、修論、あるいは博論のテーマとして、学生とともに取り組んでいます。このように近年の温暖化に伴う温帯沿岸生態系の変化の解明についても研究を進めていますので、学会員の皆さまと情報の交換ができればと思います。今後とも、よろしく願い致します。



横浪林海実験所前の海中景観

NPO/NGO 紹介

- 18 -

コーラル・ネットワーク

コーラル・ネットワーク 土川 仁  
megumu @ mint.ocn.ne.jp



写真 1 : 富賀浜で調査中の著者ら

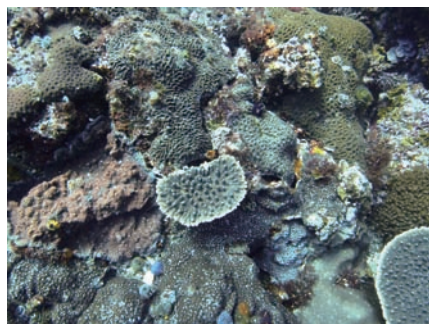


写真 2 : イヶ谷の海底の様子

コーラル・ネットワークは、1998年に日本各地でのリーフチェック実施のサポートを目的として作られたNPOです。リーフチェックは本来、サンゴ礁域での実施を想定したモニタリングプログラムですが、サンゴ群集域でもリーフチェックを実施するにあたり、コーラル・ネットワークが主催者・共催者となって開催してきている調査地もあります。その中でも一番早くから調査を行っているのが三宅島で、1998年より調査が開始されており、2000年噴火に伴う全島避難の影響で一時的に中断したものの、帰島が開始された2005年より調査も再開され、現在に至ります。

三宅島でリーフチェックを開始するにあたっては、故ジャック・T・モイヤー先生からのサンゴ群集域での調査対象種の追加などのご助言や、地元ダイビングサービスなどのご協力をいただきました。また、再開後は、三宅島自然ふれあいセンター アカコッコ館とも協力しながら実施しています。調査は三宅島内からの参加者に加え、島外からのダイバーの方も参加されての開催となっています。

リーフチェックでは、2つの水深で、調査線直下の海底の状況やその周辺の指標動物の個体数を記録していきますが、三宅島では、浅い水深の調査を島の南西部に位置する富賀浜で、深い水深での調

査を島の西部の伊ヶ谷湾カタン崎沖で実施しています。富賀浜には、テーブル状のエンタクミドリイシの大きなコロニーが広がっており、一方のカタン崎沖は、大きなコロニーはないものの、サンゴの種類が豊富な場所です。

富賀浜は2000年噴火の影響をほとんど受けませんでした。伊ヶ谷湾には大量の土石流が流入したため、カタン崎沖のサンゴにも大きな影響がありました。調査結果からも、富賀浜での底質分類での生きたハードコーラルの割合が、噴火前に37.5% (1998年) だったものが、最新の調査で52.5% (2011年) となっているのに対し、カタン崎沖では、59.4% (1998年) が43.8% (2011年) となっており、噴火の影響の有無がうかがえる結果となっています。また、オニヒトデやサンゴ食巻貝による食害も観察されています。

噴火前より調査を行っていたからこそ、変化のわかる貴重なデータが残ったわけで、継続的な調査の重要性を再認識するとともに、今後とも是非継続していきたいと思っています。

これらの調査結果は、リーフチェック本部 (米国) に送られると共に、地元の新聞やアカコッコ館の年次報告書、リーフチェックジャパンのホームページなどで公開されています。

連載 2

# しらはサンゴ村だより

-7-

WWFサンゴ礁保護研究センター 『しらはサンゴ村』  
佐川 鉄平 (自然保護室) tep @ wwf.or.jp

旧暦の5月4日はユッカヌヒー、沖縄の各地でハーリー祭が行われる日です。今年は6月5日がユッカヌヒーにあたり、白保の浜でも恒例の海人祭が行われました。祭の何日も前から海人たちがチヌマン(テングハギ)や大きなシチュー(イスズミ類)を獲りためて、祭りの前日に、浜辺で何百人分ものアゲプラー(唐揚げ)を作り、お客さんに振るまいます。私の担当は「舞道い係」。次々におろされる切り身の上で、神主のように葉っぱを振りつづける一日でした。

白保の海に美しい朝日が昇り、ハーリー祭の日がやってきました。イノへの広がりを前に、海の恵みに感謝し、豊漁と安全を祈願する厳粛な儀式が始まります。サンゴ礁で野外調査をする私たちにとっても海での安全は願いであり、必ず果たさなければならぬことでもあります。ハーリー組合の皆さんと一緒に、心をこめて祈りました。

祈願を終え、お待ちかねのハーリー競争では、森林環境保全の認証FSC材で作られたサバニ船「インケラー号」が出航しました。ふだんはしらはサン

ゴ村に展示されており、1年ぶりの登場です。戦域ハーリーにはサンゴ村ボランティアの皆さんや白保日曜市のメンバーたちも出場。本気の勝負というよりは、和気

藹々とゆるやかな雰囲気が進められる楽しいハーリーが進められます。競争を終え、毎晩練習した余興の踊りではオパーから花金(投げ銭)をいただいで喜び、座開きの三線もセンタースタッフで演奏するなど、あわただしくも楽しい一日でした。

ハーリー祭の準備や片付け、ポッターノシー(反省会+打ち上げ)の場合は、海人さんたちの話をじっくり聞ける機会でもあります。

海のこれまでと現状について、一番の知識を持っているのは、毎日海に潜っている海人たちです。魚の居場所や獲れる季節、オニヒトデの最新情報、赤土の堆積状況など、今回もいろいろなことを教えてもらいました。何度でもダツに刺されたオジーの経験談など、びつくりするような話も飛び出しました。

私たちしらはサンゴ村の役割のひとつは、ハーリー祭で感じた地元の人たちのサンゴ礁への思いや実感、資源利用の経験などを記録し、次世代へ受け継いでいく手伝いをする事だと考えています。その中で、地域の方がサンゴ礁について発信し、保



写真左: サンゴ村より余興の踊り  
写真右: FSC材でつくられた「インケラー号」

全を議論していく雰囲気作りをしていきたいと思えます。

白保でサンゴ礁学会員の方にお会いすると、多くの研究者の方が、こういった地元の方々との経験と知恵を重視し、尊重していると感じます。これから本格的に研究に携わる学生の皆さんも、まずは野外調査やサンプリングのフィールドとなる場所、地先のサンゴ礁のことを教えてもらってはどうか。面白い話が聞けるだけでなく、研究上の新しいアイデアや着眼点が見つかることもあると思いますよ。ただし、サービス精神からパーフカー(ほら吹き)になってしまう人が多いようなので、お気をつけて。

WWFサンゴ礁保護研究センター 『しらはサンゴ村』  
〒907-0242 沖縄県石垣市白保 118  
Tel.0980-84-4135 Fax.0980-86-8865  
<http://www.wwf.or.jp/shiraho/>  
(財)世界自然保護基金ジャパン (WWFジャパン)  
<http://www.wwf.or.jp>

連載 3

## サンゴ礁関連施設 深訪 INQUIRY -24-

パラオ国際サンゴ礁センター  
Palau International Coral Reef Center

“Capacity Enhancement Project  
for Coral Reef Monitoring”

JICA 派遣専門家 (チーフ・アドバイザー)  
中谷 誠治 nakayaseiji @ hotmail.com

マンタやナポレオン、カムリブダイの群れと潜りたい方は、成田から直行便も飛んでいるパラオに来てください。パラオは、裾礁、環礁、堡礁、陸封塩水湖など多様な沿岸地形を持ち、高い生物多様性を示します。そのため、世界中からダイバーなど多くの観光客が訪れ、パラオの経済を牽引しています。したがってサンゴ礁を中心とした島嶼-沿岸生態系の保全はここでは重要な政策課題です。その役割の一端を担うべくパラオ国際サンゴ礁センター(PICRC)が日本の無償資金協力を得て建設され2001年にオープンしました。設立後も国際協力機構(JICA)による技術協力プロジェクトや環境教育分野の青年海外協力隊員の派遣を通じパラオと日本の協力が継続しています。

2006年にはパラオの呼びかけでミクロネシア・チャレンジが発足しました。これは、2020年までにパラオ、グアム、北マリアナ諸島、ミクロネシア連邦およびマーシャル共和国の陸域資源の20%、近海資源の30%を有効に保全しようというものです。

これにより、PICRCにはパラオだけでなくミクロネシア地域の沿岸環境や資源の保全に関する調査・研究の拠点として期待されています。

PICRCは、陸域開発がサンゴ群集に及ぼす影響などの調査や研究、サンゴ礁や藻場に定点を設けたモニタリングを行い、また併設されている水族館等を利用して環境教育に取り組んできました。

2009年にはPICRCは、サンゴ礁の保全にさらに貢献できるようJICAとともに3年間にわたる「サンゴ礁モニタリング能力向上プロジェクト」を開始しました。これは海洋保護区(MPA)によるサンゴ礁管理に必要なPICRCのモニタリング能力を高めることを目的としています。これまでMPAの有効性を測定するため、MPAの設置目的に応じた生態学のおよび社会経済的な指標を設定し、データ収集のためのモニタリングデザインと方法を検討しました。4ヶ所の対象MPAを選定し、各州のモニタリング担当者を訓練し、昨年よりデータ収集を開始し、データベースを整備しました。今後はモニタリングに関する一連の作業の流れを記述した手順書を作成し、パラオ各州およびミクロネシア・チャレンジ諸国に普及する予定です。

これまで、プロジェクトの国内支援委員会でのアドバイスやカウンターパートの本邦研修などで日本サンゴ礁学会会員の皆様から多大なご支援をいただき感謝いたします。パラオのサンゴ礁は日本に比べ非常に良好な状態にあり、交通の便もよく素晴らしい研究フィールドです。また、多くのパラオ人は親日的です。PICRCは実験室や会議室、宿泊施設、調査ボートなどを備えています。サンゴ礁学会会員の皆様がPICRCを研究の場としてご利用されるよ



サンゴ礁モニタリングの様子



ロックアイランドでしばしの休憩

うお願いします。それにより、ここで調査や研究に励んでいる研究員も最新の研究動向や技術・知見に触れることができ、10年の節目を迎えたPICRCが太平洋のサンゴ礁研究拠点としてさらなる発展を遂げと期待します。

# 日本サンゴ礁学会 第14回大会 ご案内

日本サンゴ礁学会第14回大会を2011年11月3日～6日に沖縄県那覇市「沖縄県男女共同参画センター ている」で開催します。皆様のご参加をお待ちしております。

第14回大会実行委員長：琉球大学 藤田 和彦  
TEL: 098-895-8506 E-mail: fujitaka@sci.u-ryukyuu.ac.jp

**会場**  
 沖縄県那覇市「沖縄県男女共同参画センター ている」  
 地図: [http://www.tiruru.or.jp/?page\\_id=31](http://www.tiruru.or.jp/?page_id=31)  
 及び「沖縄県市町村自治会館ホール(6日午後のみ)」  
 地図: <http://www.okinawa-jichikaikan.com/access.html>

## 大会参加申し込み、及び研究発表申し込み方法

参加者名簿作成のため、大会にご参加の方は必要事項をご記入の上、9月2日(金)厳守で大会事務局までE-mailまたは郵送でお申し込み下さい(郵送の場合は必着)。

※日本サンゴ礁学会HP (<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>) から参加・発表の申し込みフォーム(Excelファイル)がダウンロードできます。こちらに記入してE-mailで添付送信すると大変便利です。

### 【申込先】

日本サンゴ礁学会第14回大会事務局  
 〒903-0213 沖縄県西原町千原1  
 琉球大学 理学部 物質地球科学科 藤田和彦 研究室 気付  
 E-mail: 14thjcrs@gmail.com (subject を"jcrs14 参加申込"として下さい)

### 【記入事項】

- 参加者氏名・所属 (学生の方は、その旨ご記入下さい)
- 参加者連絡先:(勤務・通学先または自宅の)住所・電話・Fax・E-mail
- 参加登録費支払い方法:事前支払い・当日支払い を選択
- 懇親会:参加・不参加 を選択
- 要旨集:PDFを希望する・冊子を希望する を選択  
 ※紙資源節約のため、本大会では希望者には要旨集をPDFで配布いたします。ノートパソコンほか携帯情報端末で要旨を閲覧できます。要旨集をPDFで希望される方には、大会前にメールでお送りいたします。なお、PDFを希望されても参加登録料の割引はいたしません。PDFと冊子の両方を希望することはできません。
- お弁当の注文:11月4日(する・しない) を選択、5日(する・しない) を選択  
 ※会場周辺には昼食をとれる飲食店が少ないため、お弁当の注文をお薦めします。値段は一食500円程度を予定しています。
- 託児所の利用:する・しない を選択 (利用される方には追って詳細をご連絡いたします)  
 ※大会期間中、児童の保育を必要とする方のために、会場内に託児所を設置し、その費用の一部を助成することを検討しています。託児所を希望される方は、大会申し込み時にお申し出下さい。
- 発表:有・無 を選択  
 ※発表者は学会員に限りです。  
 ※発表される方は以下の項目についてもご記入下さい。
- 発表形式:口頭発表・ポスター発表 を選択  
 ※時間とスペースの都合上、発表は一人につき口頭またはポスターのどちらかを1演題までとさせていただきます。  
 ※発表形式は、人数等の都合で実行委員会にて調整させていただきます。ご希望に添えない場合もございますが、予めご了承下さい。
- 発表題目:
- 発表者氏名・所属:
- 発表内容の概略(100字程度)
- 若手優秀発表賞へのエントリー(35歳以下の学会員対象):する・しない を選択

スケジュール 2011年11月3日(木・祝日)～11月6日(日)

- » 8月1日(月) 発表・事前参加申込開始
- » 9月2日(金) 発表・事前参加申込締切 (電子メールおよび郵送による受付)
- » 9月30日(金) 要旨締め切り (電子メールおよび郵送による受付)
- » 10月14日(金) 大会費事前払い振込み期限 (これ以降は当日払いとなります。)
- » 11月3日(木・祝日) 評議員会、各種委員会
- » 11月4日(金) 大会初日  
 午前:大会受付・口頭発表  
 午後:ポスターセッション・口頭発表  
 夜:自由集会
- » 11月5日(土) 大会2日目  
 午前:口頭発表  
 午後:ポスターセッション・口頭発表  
 夕方:総会  
 夜:懇親会(会場:パシフィックホテル沖縄)
- » 11月6日(日) 大会3日目  
 午前:公開シンポジウム①「サンゴ礁学—サンゴ礁の未知なる世界へ挑む:研究の最前線—」  
 午後:公開シンポジウム②「沖縄県移植再生プロジェクトのキックオフシンポジウム(仮題)」  
 ※6日午後は沖縄県市町村自治会館ホールで開催

## 大会参加登録料

登録料	会員	事前振り込み (10/14まで)		当日支払い	
		一般	学生	一般	学生
		5,000円	3,000円	7,000円	4,000円
	非会員	7,000円	5,000円	9,000円	6,000円
	懇親会費	5,000円	3,000円	6,000円	4,000円

※事前振込みの場合、前回大会よりも500円(学生)、1000円(一般)安く設定してあります。当日払いの場合、前回大会よりも1,000円(一般)高くなります。事前振込みにご協力下さい!

郵便振替口座番号:01780-3-125560  
 口座名称:日本サンゴ礁学会第14回大会  
 通信欄の記入事項:氏名、所属、一般・学生、懇親会への参加・不参加  
 ※参加登録料:振込み手数料はご負担下さい。  
 ※複数の方がまとめて振り込まれても結構です。この場合も、上記を明記して下さい。  
 ※郵便局以外の金融機関から振り込む場合:  
 店名:一七九(イチナナキユウ)店(179)  
 預金種目:当座 口座番号:0125560  
 ※新規会員の方の登録料は無料です。懇親会費のみをお振込み下さい。

## 研究発表について

注)発表を行う場合には、学会規定により、発表者は発表時に学会員であることが必要です。  
 ※口頭発表の講演時間は質疑応答を含めて1人15分です。発表機材は液晶プロジェクターを用意いたします。  
 ※ポスター発表はパネルの大きさが約180cm(縦)×90cm(横)を予定しています。この範囲に収まるように各自ポスターの大きさを設定して下さい。

### 【若手優秀発表賞について】

今大会では、35歳以下の学会員を対象とした若手優秀発表賞の選考を行います。ポスター・口頭発表、それぞれの形式ごとに受賞者を1～2名決定いたします。対象は選考を希望する発表者です。選考内容は、研究内容およびプレゼンテーションの方法です。本賞にエントリーを希望される方は、研究発表申込時に申告していただきますようお願いいたします。

## 要旨集原稿作成要項、および送付先(9/30必着)

※日本サンゴ礁学会HP (<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/>) から要旨のひな形(Wordファイル)をダウンロードできます。レイアウトの統一にご協力下さい。

### 【要項】

用紙サイズ:A4 1枚、上下3cm・左右2.5cmをあける  
 書式:  
 (一行目)タイトル:MSゴシック、14pt、中央揃え  
 (二行目以降)氏名:MS明朝、12pt、中央揃え 発表者氏名の前に○印

(三行目以降)所属:MS明朝、10pt、中央揃え  
 (四行目以降)キーワード:MS明朝、10pt、中央揃え  
 "キーワード:"に続けて入力  
 (五行目以降)本文:MS明朝、12pt、両端揃え  
 その他:図表、写真は適宜貼りこんで下さい。

### 【送付先】

日本サンゴ礁学会第14回大会事務局  
 〒903-0213 沖縄県西原町千原1  
 琉球大学 理学部 物質地球科学科 藤田和彦 研究室 気付  
 e-mail: 14thjcrs@gmail.com (subject を"jcrs14 要旨"として下さい)

※電子メールの添付によるご送付にご協力下さい。  
 ※電子メールによるPDFファイル添付送信の場合PDFに変換したファイルをご送付下さい。  
 必ずフォントの埋め込み設定を行ってからPDF化して下さい。

## その他の企画について

- <公開シンポジウム①>  
 ■日時:11月6日(日) 午前10時～12時  
 ■テーマ:「サンゴ礁学—サンゴ礁の未知なる世界へ挑む:研究の最前線—」  
 ■オーガナイザー:鈴木 敦・大葉英雄・土屋 誠・茅根 創  
 ■主催:日本サンゴ礁学会、共催:新学術領域「サンゴ礁学」  
 ■概要:日本サンゴ礁学会設立から15年がたち、さまざまな分野の研究結果が蓄積し、新しい異分野融合の種として新学術領域「サンゴ礁学」が立ち上がり、その成果の一部は本学会が編集した「サンゴ礁学—未知なる世界への招待—」にも盛り込まれた。本シンポジウムは、両企画に参加・執筆した研究者が、その紹介と今後の展望を議論する。  
 ■詳細は後日、学会MLおよびWebに掲載します。

- <公開シンポジウム②(準備中)>  
 ■日時:11月6日(日)午後2～5時  
 ■テーマ:「沖縄県移植再生プロジェクトのキックオフシンポジウム(仮題)」  
 ■主催:日本サンゴ礁学会、共催:沖縄県  
 ■詳細は後日、学会MLおよびWebに掲載します。

- <自由集会(提案募集)>  
 ■日時:11月4日(金) 午後6時半～8時半  
 ■学会参加者が自由に企画する集会「自由集会」を募集し、採択された企画(数件採択予定)には大会委員会が実施場所を提供いたします。  
 ■詳細は後日、学会MLおよびWebに掲載します。

- <NPOポスターコーナー(出展団体募集)>  
 ■学会の社会連携を推進するため、サンゴ礁に関する活動を行うNPO(非営利団体・任意団体も歓迎)のポスターコーナーを設置します。出展団体から1名のみ参加費を無料とします。  
 ■詳細は後日、学会MLおよびWebに掲載します。

# It's Time to Fly! 5

国立環境研究所 本郷 宙軌 hongo.chuki@nies.go.jp



写真左：今回滞在したプロヴァンス大学。南フランスのマルセイユにある大学で、100年以上の歴史があります。写真右：マルセイユの港・地中海。アパートから歩いて5分ほどで、地中海が広がっています。



■みなさんハイサイ! フランスではBon jour! ボンジュールと書くのは簡単ですが、発音するのは難しい。“ボン”とまず軽く言った後、口をすぼめながら“ジュール”と言うと、ネイティブっぽく聞こえます。そしてすかさず、ジュ・マベル・〇〇(私の名前が〇〇です)と言うと、自己紹介はばっちりOKです。ところが、HERMES(エルメス)の発音でもわかるように、フランス人は“H”の発音が苦手なため、HONGO(ホンゴウ)という名前を持つ私は、自己紹介で苦労することが目に浮かびました。そんな私ですが、昨年2カ月間にわたってフランスで研究してきましたので、その一端を紹介したいと思います。

今回の滞在は、日本学術振興会の組織的な若手研究者等海外派遣プログラム(総合地球惑星科学の推進を担う若手研究者の育成に向けた海外派遣プログラム:東京大学)によって派遣されたもので、大学院生やボス

ドクを海外の研究機関に派遣し、国際的視野に富む研究者の養成を目的としたものです。

■なぜフランス? この数年間、私は化石サンゴを用いて、過去のサンゴ礁生態系を復元する研究に取り組んできました。これまで琉球列島のサンゴ礁を中心に観察してきましたが、そろそろ海外領土(例えば、タヒチ、ニューカレドニア、マイヨットなど)から採取された化石サンゴが多数保管されているフランスを足掛かりにして、世界のサンゴ礁へと視野を広げていきたいと思いました。善は急げ!早速、南フランスの有名なサンゴ礁地質学者のLucien F. Montaggioni教授(University of Provence)にコンタクトをとってみました。

教授とはこれまでまったく面識が無かったのですが、私のようなよく分からない日本人ボスドクを、受け入れてもらえるのか少し心配していました。ところが、しばらく

すると、“いつでもWelcome!”と、嬉しいお返事をくれました。お互いに会ったこともなく、顔も分からないので、待ち合わせ場所でちゃんと出会うのがドキドキでしたが、そこはサンゴ礁が好きなの同士、一目で分かりました。

さて、「郷に入っては郷に従え」と名言がありますので、英語ではなくフランス語で自己紹介(ジュ・マベル・チュウキ・ホンゴウ)したところ、当初の心配とは逆に、すぐに覚えてくれました。なぜなら、ファーストネームで呼び合う国なので、CHUKI(チュウキ)は呼びやすいようです。ちなみに、ある研究者に「Dr. イロヤは元気か?」と聞かれました。イロヤ? いったい誰だろうと考えていたら、これこそ“H”マジックでした。この方は皆さんのよく知っている人で、学会誌編集委員長かつ私の上司である、Dr. Hiroya Yamanoのごとでした。

■若手学生へのメッセージ この短期間の滞在を通し、共同研究は順調に進み、今年の冬には第2弾の共同研究として、フランスで知り合った研究者とニューカレドニアにて研究する予定です。若手の方、特に学生の方々には、時間に余裕のある学生の時に、海外で研究することをお勧めします。多くの研究者と知り合うことができるメリットに加えて、集中的に研究出来るため、知識は飛躍的に向上します。そして、今回の滞在で気がついたことは、語学がいまいちでも、専門知識があるだけで議論は十分でき、逆に、語学が出来ても、専門知識がないと議論は出来ないということです。そこで、十分な専門知識と、それを伝える程度の語学力が身に付いたと感じた時こそ、It's time to flyです。

ダイジェスト

**2009-2011年度 2011-2013年度  
合同評議員会議事録**

日時: 2011年7月26日(火) 14:00~17:00 場所: 東京大学理学部1号館C棟3F336室

議事録は学会のホームページ[学会案内]で全文を公開しています  
(パスワード:hongo20110726)※ 部外秘。

**2010-2011年度後半の活動報告及び  
2011-2013年度活動計画**

①事務局報告: 会計報告は収入370万円、支出は500万円(10ICRSプロシーディングス代150万円を学会会計より川口基金に返納)。会員572名で2010年11月から25名減。予算は収入360万円、支出が303万円。②企画委員会: 12ICRSは、茅根・日高議長提案のミニシンポジウムが採択。若手支援は、一人当たり10万円×10名を上限として支援。書籍「サンゴ礁学」は、8月末には刊行予定。③学会誌編集委員会: 学会誌発行状況: Galaxea12-1と12-2・日本サンゴ礁学会誌12を発行。今年はGalaxea13-1/2の合併号を、APCRS Proceedings 特集としてCDで発行予定。Galaxeaをオンライン化する。④広報委員会: ニュースレターNo.48、No.49を発行。今後、ニュースレター50~52号発行、国立環境研究所のサービス停止に伴い、9月にホームページの移転とリニューアルを予定。⑤国際連携委員会: 第3回アジアサンゴ礁シンポジウム(3APCRS)が、2014年に台湾で

開催予定。12ICRSのブース展示について、JCRSが3mの背面(A\$1300)、新学術領域と3APCRS/台湾サンゴ礁学会(TCRS)が2.4mの側面(A\$1000)で展示し、3団体で共同出展。⑥保全委員会: 今後ホームページに保全委員会のページを設ける。⑦安全委員会: 欠席 ⑧学会賞委員会: 学会賞・川口賞は、7月から推薦者の募集を開始。⑨選挙委員会: 6月5日12日に開票及び繰上げ当選者抽選を行い、27名の評議員が当選。⑩その他: 西平前会長を名誉会員に推薦、11月の総会で審議。細則、日本学術会議への学会登録を検討。

**[2011-2013年度体制]**

会長: 土屋 誠、副会長: 鈴木 款、事務局長: 茅根 創、監査: 綿貫 啓・鈴木倫太郎、企画委員長: 瀧岡和夫、学会誌編集委員長: 山野博哉、広報委員長: 藤村弘行、国際連携委員長: 日高道雄、保全委員長: 中野義勝、学会賞委員長: 井龍康文、安全委員長: 岡本峰雄、選挙管理委員長(未定)。評議員の会長推薦者: 井口 亮。事務局補佐: 浪崎直子、庶務: 山本将史、井上志保里。

報告

**日本サンゴ礁学会  
会長・評議員選挙結果報告**

**日本サンゴ礁学会の会長・評議員選挙を実施しました。**

ご協力を賜りまして誠にありがとうございました。2011年4月4日に公示し、5月18日から6月1日にかけて投票を実施いたしました。お蔭さまで、6月5日(日)に開票作業を無事に終了することができました。その後、3名の当選者から辞退の申し出があり、6月12日(日)に繰上げ抽選を実施し、6月18日(土)に会長1名・評議員27名の当選者を確定いたしました。今回の有効投票数は68票で、2年前の前回(111票)に比べて大幅に減少してしまいました。東日本大震災の影響もあつたかと思われませんが、「評議員選挙立候補・被推薦者リスト」の不備で皆さまが戸惑われたのではないかと猛省しております。ご迷惑をおかけして誠に申し訳ございませんでした。なお、評議員の残り3名分が会長による指名枠として残っております。

**[ 当選者のお名前 ]**

**会長当選者(敬称略)**

土屋 誠

**評議員選挙当選者(敬称略・五十音順)**

浅海竜司、安部真理子、磯村尚子、井龍康文、梅澤 有、大葉英雄、岡地 賢、岡本峰雄、カサレト・ベアトリス、木村 匡、栗原晴子、鈴木 淳、鈴木 款、竹川大介、長田智史、中村 崇、中森 亨、瀧岡和夫、浪崎直子、服田昌之、深見裕伸、深山直子、藤田和彦、藤村弘行、本郷宙軌、緑川弥生、渡邊 毅(27名)



1998  
記念すべき  
第1号!  
何が始まるの〜  
わくわくどきどき

2002  
14号  
突如怪しい  
キャラクターが  
出現

2005  
沖縄で  
第10回国際サンゴ礁  
シンポジウムが開催  
その時の様子を  
掲載

2008年は  
国際サンゴ礁年  
イメージキャラクターと  
お友だちが  
表紙になったよ〜

2006  
ノミノシ...  
あっという間に  
30号

2008  
大盛況に終わった  
日本サンゴ礁学会  
第10回大会  
懇親会ではラブラリーな  
一夜を過ごしました

**編集後記**  
Editor's postscript

50号!! 記念が発行できるのも、様々な現役広報&OBの方々、執筆者、そして編集の原部さんの助けのおかげです。また、これからのJCRSニュースレターをお楽しみに。

編集担当 中村



2011年8月10日発行

日本サンゴ礁学会ニュースレター [2011/2012 No.1]  
Newsletter of Japanese Coral Reef Society No.50

- 編集・発行人 / 「日本サンゴ礁学会広報委員会」
- 藤村 弘行・井口 亮・梅澤 有・中村 崇・浪崎 直子・波邊 敦
- 発行所 / 日本サンゴ礁学会 ● 事務局 / 茅根 創 <kayanne@eps.s.u.tokyo.ac.jp>
- 〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学大学院 理学系研究科 地球惑星科学専攻 Fax: 03-3814-6358